大事なことは自分の目で観察すること！

街の中は生きものでにぎわっている

都市は雑踏だけではない。自然もある。しかもけっこうある。人工的な環境の中でも、多くの生きものが、にぎわい、奮闘し、そして循環している。見つけた生きものをメモして「生きもの手帳」を作ってみれば、多様な生物とともに「ワタシも生きている」ことを知るのだ。

明治大学農学部教授
倉本　宣

●くらもと・のぼる　1955年東京生まれ。東京大学理学系研究科植物学博士課程中退・博士（農学）。主な研究テーマは首都圏における生物多様性の保全と再生。著書に『新版　生態工学』（朝倉書店）、『絶滅危惧種の生態工学』『生物多様性緑化ハンドブック』（共に地人書館、いずれも共著）などがある。

そもそも、生態系とは？

生態系という言葉は自然と同じように用いられることもありますが、本来は「外部と隔てられた空間で、そこには生きものとその環境が存在し、物質の循環やエネルギーの流転がみられるシステム（系）」と定義されています。ですから、エネルギーや物質を外部に依存している都市は本来の意味では生態系ではありません。しかし、都市生態系という言葉が考案され、都市を物質やエネルギーの面からとらえられるようになって都市における自然の研究がやりやすくなりました。

より厳密に考えると、都市はさまざまな生態系の集合である景観（ランドスケープ）としてとらえるほうがもっと適切だと考えられます。都市などを含めた生態系を研究する分野のことを、景観生態学といいます。景観の構造と機能、さらに変化を研究します。

ここでは、都市という景観を構成している生態系の中から、私たちの生活のごく身近な空間の典型的なものを八つ取り上げて、その特徴的な生きものについて紹介します。

住宅の生態系

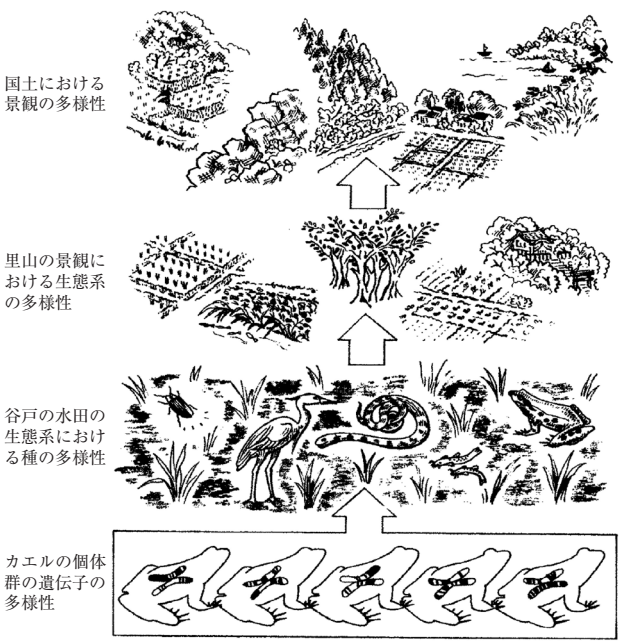
それほど広くない住宅にもさまざまな生きものが生息・生育しています。『家は生態系―あなたは20万種の生き物と暮らしている』（ロブ・ダン、白揚社、二〇二一年）という本には、たくさんの種類の動物が家の中に住んでいることが紹介されています。

家から庭に出てみると、落ち葉や枯草の下、コンポストボックスには、オカダンゴムシやワラジムシ、ミミズのなかまがたくさんいます。これらは有機物を食べて分解する分解者です。

毛虫やアブラムシ、ハムシは生産者である植物がつくった有機物を食べる一次消費者です。ガラス窓の外側には夜になるとヤモリがやってきます。庭にはトカゲやカナヘビ、ヒキガエルがいます。一次消費者を食べる二次消費者です。ヤモリが昼間は公園の樹名板の裏に潜んでいることを知った学生は、実際に「調査中」とだけ書いた樹名板を公園の樹木につけさせてもらいました。冬になると、樹名板の裏はもっとにぎやかになるそうです。

これらは、歩いて移動する動物ですから、移動できる場所が廊下のようにつながっていることが重要です（景観生態学ではコリドーと呼びます）。つながっていれば、ある庭で絶滅しても、別の庭から入って来ることができるので絶滅が起きにくくなるといわれています。

スズメやヒヨドリ、キジバトなども庭にやってきます。バードバスを



里山の生物多様性　遺伝子、種、生態系、景観の４レベル（亀山章監修／倉本倉本宣・佐伯いく代編『新版 生態工学』 朝倉書店、2001年）